天は生命保険を払ってくれない

須江

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
天は生命保険を払ってくれない

【Ｎコード】
Ｎ２２２０Ｎ

【作者名】
須江

【あらすじ】
レクシー２３歳。ジー５歳。二人ぼっちで生きている。お互い、必要なのだ。流血描写注意。

るるる、かむむむ、か自分で作った歌を口ずさみながら、少年は床に広げられたチラシの裏に何かを描き込んでいた。指に力を込めて緑色のクレヨンを握りしめ、まるで抽象画のような図柄を刻んでいる。空になったコーヒーカップをテーブルに戻してから、レクシーは少年めいた顔をにっこりとほころばせた。

「ジー、そろそろお昼の時間だよ」

設計図を畳み新聞の下に押し込む。ジーも真似をしてチラシを折りたたみ、自分の頭よりも高い位置にあるダイニングテーブルへそれを乗せた。取り上げて広げたら、あ、と小さく抗議の声をあげる。膝に飛びついて取り上げようと手を伸ばすが、幾らレクシーが華奢な体格とはいえ、5歳児に抱きつかれてよろけるほどではない。

「なんだい、これ」

「かえして！」

「教えてくれたらね」

「いじわる！」

一度ひっくり返したが、やはり読めない。そう、どうやら文字のようだった。何となく、ジー、という名前と、おそらくレクシーと書かれている文字を判別することはできたが。思わず微笑んで、ぎゅっと抱きついたままのジーの頭を撫でた。

「うん？なあに？」

「うただよ」

つんと尖った唇を摘んでやろうかと思ったが、ぷいとそらされ、柔らかい頬をズボン越しに膝へと擦りつける。

「レクシーとジーっていうの」

「ふーん、どんな歌？」

顔を伏せたまま、先ほどの鼻唄を繰り返す。どうやらこのリズムに乗って、レクシーとジーを繰り返すだけらしい。

「素敵な歌だね」
抱き上げてやれば驚いたような表情を浮かべる。この子は未だ、人からの愛情に驚くことが多々ある。だが安心させるようにっこり微笑んでやれば大丈夫だ。肩の力が抜けるのが分かった。
しばらくもじもじと身じろぎした後、ジーはレクシーのポロシャツの肩の辺りを握りなおした。オーバーオールの裾から覗いたつま先をぶらぶらさせながら、照れくさそうにレクシーの頬へ唇を寄せる。これが仲直りの方法だと教えたのは他ならぬレクシーで、返礼に彼自身も、林檎のような頬に短いキスを与えた。最近また、少し重くなった。抱えなおしながら、レクシーは少年の成長に目を細めた。首に腕を回して抱きついてくるときに、ぱらぱらと黒髪が頬を叩く。そういえば髪も伸びたかな、と頭をしげしげと見下ろす。近いうちにまた切ってやらねばならないだろう。
「外へ食べにいこうか。何がいい？」
人差し指と中指で前髪を梳いてやりながらレクシーが尋ねると、ジーは即座に、はっきりと告げた。
「ダンキンドーナツ」
「だめだよ。今朝も食べただろう」
「レクシーはなにがいい？」
「なんでも。ジーの好きなものでいいよ」
「じゃ、ダンキンドーナツ」
仕方ないな、と笑いながら財布を目で探す。
「こうしようよ。お昼は角のチャイニーズ。帰りにドーナツ屋に寄って、明日の朝ごはんを買おう」
何でダンキンなの、と聞けば、ジーは胸を張って答えた。
「おまわりさんがたくさんいるよ」
「お巡りさん好きなの？」
静かな声で聞けば、こくこくと首を振る。
「好きっていうか、おまわりさんは、わるいひとからみんなを守るんでしょ？」

「らしいね」
「レクシーは？きらいなの？」
「嫌いじゃないよ」
苦手なだけ、と呟くのは心の中だけだった。

ジーは両親はおろか、いたはずの姉や兄の顔も知らない。覚える前に、レクシーが肉きり包丁で叩き潰してしまったからだ。
レクシーにはとても優しい姉がいた。頭もよかったし何より黒曜石のような瞳が美しい、本当に誇ることのできる、たった一人の姉だった。
彼女を殺した変質者の家族はほんのご近所さん。どのような状態で発見されたかなんて、言うのもおぞまい。前からレクシーは忠告していたのだ。あいつが姉さんを見る目つき、まるでワニみたいだ。けれど彼女は笑って首を振ったのだ。レクシー、人を信じなきゃだめよ。
レクシーは犯人が発覚するよりも早く、お得意のちょっとはにかんだ無害な笑顔を浮かべて彼らの家を訪れた。後ろ手に隠していた包丁で、まずは出迎えた母親を一撃。彼女は額から鼻筋までをぱっくり割られてのけぞった。突き飛ばして床に倒したときもまだ足がぴくぴくしていたから、思い切り頭蓋骨を横から踏み付け潰した。動きを止めたと知る前に二階の子供部屋へ駆け上がり、奴の妹の頭を後ろから。振り返暇もなかったはずだし、喉まで真っ二つにされ首が肩にめり込んだから、痛みはそんなに感じなかっただろう。悲鳴もあげなかった。目ざとく隣の部屋から逃げようとした弟を追いかけ、激しく叫び散らす前に階段の手前で背中に包丁を突き刺した。血しぶきあげて倒れるのを足で蹴り包丁を抜こうとしたが、癇癪のせいで思い切り食い込んだ刃物は抜けなかった。仕方なく妹の部屋に引き返し、何かの優勝トロフィーを拝借して何度か頭を殴った。後頭部が陥没して、髪の毛と脳みそが飛び散った。

あとは父親と真犯人だけ。壁に掛かった散弾銃を持ち出し、こんなもの家に飾ってるから息子が変態に育つんじゃないか、と床に伏したままの母親に文句を言う。勿論反論はなかった。
帰ってきた父親は、血まみれなうえ顔の原型を留めない妻をみて驚いたらしい。叫んで逃げようとしたが、ドアの影からトロフィーでがつん。銃は最後まで使いたくなかったので、母親とまとめて居間まで引きずっていき、ガソリンをかけた。火は主役が帰ってきてからのお楽しみだ。

幾ら女子学生を無残に殺す人間でも、一気に家族が死に絶えたとなると動揺するらしい。父親とおんなじ行動を取ったのでおんなじように捕まえた。ガムテープで椅子に縛り、とりあえず言い分は聞いた。何の話だ、俺は知らない。白々しい嘘を、と銃を撃てば、飛び散った蜂の群れのような弾は奴の右肩を吹き飛ばした。物凄い勢いで泣いた。
泣いていたのは彼だけではなかった。呼応するように、二階からの泣き声。ゆっくりと階段に足をかけたとき、奴は痛みを堪えながら懸命に哀願した。やめて、殺さないで。

蝿のたかっている弟を越え、突っ伏したままの妹の部屋を覗きこみ、その隣の隣、薄く開いたドアの中に入り込む。
ベビーベッドの中で、その赤ん坊はぐずぐずと泣いていた。まだ1歳ほどだろうか。黒い髪、黒い眼。その瞳はまるで黒曜石のよう。
救いを求めるよう、青いおくるみの中から赤ん坊は腕を差し出した。思わず手を伸ばしていた。
頬擦りすると、べったりついた血に恐れをなすどころか、人肌のぬくもりに安心してしがみついてくる。
レクシーは、赤ん坊が眠りに落ちるまで、ずっとその粉ミルクの匂いがする頬に自らの頬を押し付け、腕を揺らし続けていた。

起さないよう細心の注意をはらって階下に戻り、残っていたガソリンを全部奴にぶちまけた。またわめこうとしたのでガムテープを長めに張り付ける。最後に奴はまだ、女々しい泣き言を繰り返していた。やめて。その子を殺さないで。そんなことするわけない、とは言ってやらなかった。

家を出た後に火をつけた。その後は知らない。ただ腕の中にある重みだけが、空っぽになった心が飛んでいかないための、唯一の錘となった。

「レクシー？」
ジーが不安そうに耳元で声をあげる。
「ううん、ごめん」
レクシーは泣きそうになりながら、あのときと同じくジーの頬に自らの頬をくっつけた。昔二人の間を流れていたのは冷え切った真っ赤な血潮だった。今、触れ合った合わせ目を、生ぬるい涙が滑っていく。
「どしたの？」
ジーは驚いて、ぽろりと零れた涙を小さな指で拭う。
「ドーナツ、いやだった？」
「違うよ。違う。どうしたんだろう。おかしいね」

見つめてくる真っ黒な瞳に、涙が吸い込まれる。不安な顔にさせてはいけない。
徹底的に破壊したのだから、今度は守らなければ。なにせジーはこんなにも小さいのだから。一人ぼっち同士だから分かる。この子がこれ以上余計な傷を負わないよう、全部選んで、守って、愛してあげなくてはならないのだから。

ようやく見つかった財布をポケットに押し込み、ついでにズボンの裾にグロッグを差し込む。固いの当たって足が痛い、というジーの背中を撫でてやりながら宥める。
「しょうがないだろう、これで守るんだよ」
「レクシーを？」
「そう。それとジーをね」
笑ってやれば、ジーは初めて、照れた様な笑顔を見せた。
「そうだね。なくなってからじゃ遅いもんね」」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2220n/

天は生命保険を払ってくれない

2010年10月10日12時59分発行